

聖書：ローマ 8：33～34

説教題：右の座でとりなしている主

日時：2015年12月27日（朝拝）

ローマ書の中で最も力強く福音が語られている 8 章のクライマックスと言える部分を今、見ています。今日は 33～34 節です。まず 33 節に「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。」とあります。ここで取り扱われているのは私たちクリスチャンの恐れです。私たちは素晴らしい将来を約束され、そこに向かって日々戦いの歩みをしていますが、地上ではなお罪を犯す存在です。日々罪を犯してしまう存在です。そしてクリスチャンは罪を自覚しやすい人々です。霊的に目覚めさせられた人として人一倍罪が気になります。そういう葛藤の中にある人が様々な苦しみの中に置かれると、どのように考えやすいでしょうか。それは「私はあの罪、この罪のために、このような苦しみにあっているのだ。」という考えでしょう。ここの「訴える」という言葉は原文では未来形で書かれていますから、特に考えられているのは最後のさばきであると言えます。クリスチャンはこう思うのです。自分は確かにキリストを信じて救われた者ではあるが、なかなか霊的に成長できず、日々罪を犯しているから、最後には救われないのではないか。やがての審判の日には様々な方面から訴えられて救いから落ちるのではないかと。

確かに私たちを責め立てる存在がいることは事実です。ヨハネの黙示録 12 章 10 節に「私たちの兄弟の告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者」という言葉が出てきます。これはサタンのことです。サタンは私たちの罪を指摘し、このような者は救われるべきではないと訴えます。サタンは自分に従わせている勢力も持っていますから、その勢力も一緒になって私たちを責め立てます。「お前はこれこれこんな罪も犯した。だから今こんな目にあっているのだ。すでに見離されているお前が神の救いに入れられるはずがない。」そして私たちはこのような声に揺さぶられ、意気消沈させられて、自分はまだダメかもしれないと思い始め、絶望への道をたどってしまう。

しかしそのような敵対者たちの訴えは功を奏さないということがここに語られています。ここで私たちのことが「神に選ばれた人々」と言われています。これは一言で言えば、私たちは神の一方的な恵みによって今、この恵みに立たせていただ

いている者たちということです。確かに私たちがイエス・キリストを知り、この方に全生涯をささげて行くと信仰告白しました。しかしより根本的に言えば、私たちは私たちの決心に先立つ神の選びによって救いへと導かれた者たちです。8章29節：「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。」 この神の一方的な選びのみわざがあって、今日、この信仰に生きている私たちがあるのです。このように神に特別に愛され、神の特別な守りの中で養い育てられている者たちが、途中で捨てられて終わりになるということはありません。神は必ず私たちを最後の救いに至るようにと導いてくださる方であるはずで

さて、その者たちへの訴えを神はどのように処理されるかが33節後半に力強く述べられています。それは「神が義と認めてくださるのです。」ということです。サタンはあらゆる限りの訴えを並べるでしょう。サタンはでたらめなことを言うのではなく、実際の私たちの罪を指摘します。それは私たちにとって恐ろしいことです。事実が大声で語られるのですから。一体、最後の法廷ではどうなってしまうのか。数々の訴えが並べられて自分は最後に神に退けられてしまうのではないかと恐れます。しかしここにある慰めは究極の裁判官である神が、私たちを義と宣言されるということです。どんなにサタンとその勢力が訴えても、その判決が変わることはない。

この義認の教理については、この手紙の前半で見て来ました。4章5節：「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」 この御言葉に基づいて私たちが信じていることは、神は不敬虔な者をただ恵みによって義としてくださるということです。少しは他の人よりもまだから義と認めたのではない。それ自身では何の望みも持てないような罪人を神はただキリストにあって義としてくださった。ですからサタンがいくらあれやこれやの罪を告発しても、神の判決には何の影響も及ぼさないのです。神が義と認めて下さるのです！この義認は私たちがキリストを信じる告白をした時に、この地上で与えられる祝福です。その宣言は永遠に有効であり、撤回されることがありません。最後の審判の法廷でも変わりません。神はその日にも義と宣言して下さる。私たちはそのことを信じてこの地上で歩むことができるのです。誰かが私を訴えても、ただ恵みに信頼して、「私に対する神の判決は変わらない！神が義と認め

てくださる！」と告白して歩むことができるのです。

さてパウロはさらに 34 節で「罪に定めようとするのはだれですか。」と問います。この 34 節でパウロは 33 節で述べたことをさらに強力に補強しようとしています。なぜ誰も私たちを罪に定めることはできないのでしょうか。それは私たちがより頼むイエス・キリストの力強い働きのゆえです。ここにキリストが私たちのためにしてくださった、あるいはしてくださっている 4 つのみわざが述べられています。

その第一は「死んでくださった」ということです。どんなに私たちが罪深く、さばかれるべき者たちであっても、キリストがすでに私たちの身代わりに死んでくださいました！傷なき、罪なき、きよい神の御子が人となって私たちの代わりになってくださいました。ここに十分な代価が支払われています！これに足して払わなければならないものはもう何もありません！

2 つ目に「いや、よみがえられた方であるキリスト・イエス」とあります。この復活は私たちの罪の赦しには欠かせない御業です。もしキリストが十字架上で死んでも、復活がなければ、私たちの罪が本当に処理されたかどうかは分かりません。むしろキリストは身代わりを果たそうとトライしてくださったが、それは計画通りには行かなかったのだと結論しなければならなくなります。十分にはその値を払い切れなかったので、なお死の下に閉じ込められているのだ！と。しかしキリストの復活は、父なる神が、キリストは十分にその民を贖うための代価を払ったと認めたことを意味します。復活は私たちの罪が確かに赦されたことの神の公の宣言なのです。ですから私たちはイースターの日、自分の罪が赦されたことを確信して喜ぶのです。そして神に受け入れられ、御子に結ばれて永遠の命に生きることを喜ぶのです。

3 つ目に、復活したキリスト・イエスが「神の右の座に着き」と述べられます。これはこの世界の至高の座にキリストが上げられたことを意味します。これによって世界は今やキリストが治める世界となりました。キリストはやがての世界の終わりの日まで、その座でこの世界を統治します。そしてこの世に対する神の御心を完成に至らせた後に、この国を父なる神に渡されます。その日まで私たちのために死んでよみがえられた救い主が、この世界の真の主権者なのです。その方がより頼む

私たちのためにその全権を発揮してくださるのです。

そして最後の4つ目に「私たちのためにとりなしてくださる」とあります。これは今日現在も行なわれているキリストの継続的働きです。天における大祭司としてのとりなしの働きです。私たちはキリストの働きと言うと、ともすると福音書に記されている地上における働きのことばかりを考えるかもしれません。そしてあの時代はイエス様は力強く働かれたが、今は特に何もなさっておられないかのように、まるで天でヒマにしておられるかのようなイメージを持つかもしれません。しかし全くそうではありません。かつて読んだある神学書に、イエス様の地上での働きは現在の天における働きのための準備であったと記されているのを見て、私も大きく考えが変わりました。実はイエス様は今こそ、地上での歩みを通して勝ち取った権威をもって、いよいよ本格的に救い主としての力強い働きをなさっているのです。ヘブル人への手紙7章24～25節：「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることもない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」

昔のある人々は、この聖句をもとにして間違った絵を書きました。それはイエス様が父なる神の前でひれ伏して、涙を流しながら懇願している絵です。イエス様のとりなしをそのようなイメージで理解したのです。しかしこのとりなしはイエス様が今や私たちを救うための全権を勝ち取ったお方として、確実にその実りが私たちにもたらされるように、その権威を発揮しておられる姿として理解すべきです。私たちは果たして今日の自分がこのキリストのとりなしによって支えられているということを知っているでしょうか。

イエス様は地上におられた時も、例えばペテロのためにとりなしをされました。ルカの福音書22章32節：「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」ペテロはこのイエス様の祈りを感謝せず、私なら大丈夫です、あなたを決して裏切りません！と言いましたが、ご存知の通り、彼は3度もイエス様を知らないと言って裏切りました。そして自分の罪の大きさに愕然としてどん底に落ちます。しかしそんな彼がやがて立ち直って大きな働きができたのはなぜでし

ようか。それはイエス様が彼の知らないところでとりなしてくださったからです。その力強いとりなしによって彼は立ち直り、大きな働きができる者となったのです。またヨハネの福音書 17 章には「大祭司の祈り」と呼ばれる十字架前夜のイエス様の祈りが記されています。その箇所を読む時に、イエス様がどのような思いで十字架へ進まれたかが分かります。そこにおいて主は将来の私たちのためにとりなしをしてくださいました。そのとりなしによって、また今、天で継続して行なわれているとりなしによって、今日の私たちの歩みは支えられ、守られています。少し前のローマ書 8 章 26～27 節では、御霊がうめきつつ、私たちのためにとりなしてくださると述べられました。ですから私たちは私たちの体の中にとりなし手を持っていると同時に、父なる神の右の座にもとりなし手を持っているのです。天と地の両方に私たちをとりにしてくださっている方がいるのです。内からも外からも、また低い所でも高い所からも、がっちり守られ、支えられている私たちなのです。一体何というこの上なき幸せ者と言うべきでしょうか。

今日は特に 2015 年の年末礼拝です。私たちはこの日、特にこの御言葉を恵み深く味わうことができるのではないのでしょうか。私たちがこの年、ここまで来ることができたのは、自分の知恵や努力、自分の力によったものではありません。もちろんそれらのことは神に用いられた一つの要素ではあったでしょう。しかし私たちがここまで来ることができたのは、何よりもイエス・キリストが日々、天で私たちのためにとりなし続けてくださったからです。ご自身の十字架の犠牲に基づいて常に祈り、守り導いてくださったからです。私たちはそのことを今日、心から天上におられる私たちの救い主に感謝すべきではないのでしょうか。今年も私たちは多くの罪深い姿をさらけ出して来ました。御前に情けない姿をさらけ出して来ました。感謝のあまりにも少ない日々を過ごして来ました。しかしキリストがとりなしてくださって、今日ここまでの道のりを歩いて来ることができました。そしてこの力強い主が来たる年も私たちを導いてくださる主です。私たちは過ぎ去ろうとしているこの一年の導きを感謝して、すべての賛美と栄光を主に帰したいと思います。そしてこの天にいるとりなし手を覚えて新しい年も歩みたい。どんな困難があろうとも私たちは一人で歩んでいるではありません。この主の力強いとりなしの下で守られている者たちです。この方を見上げて心を強くし、新年も主にあって心からの安心を頂いている者として主が仰せになる御言葉に従い、主が導いてくださる栄光のゴールに向かう確かな歩みに進みたいと思います。